

『ミサと聖体拝領』

マリア・ヨセフィナ 秋丸 暢子

二〇〇四年十月十四日、私はメキシコのグアダハラ市にあるハリスコ・サッカー競技場で、スペインの枢機卿によるミサにあずかっていた。この会場には、第四十八回国際聖体大会公式巡礼団として、世界各国から集まった七万人近いカトリック信者で、あふれていた。

炎天下で、人波に身動きもできず、たち続けていたが、「感謝の賛歌」のSNTTO・サント・サント・エス・エル・セニョールと意識がうすれ、座り込んでしまった。

「アグア！」と言う声と共に、冷たい水が頭から首筋に流れ、我に返ると隣の婦人がスペイン語で大丈夫かと話しかけ、水を飲ませてくれた。「グラシアス」と何回もお礼を言い立ち上がると、涙があふれてきた。

その時、「聖体大会は、カトリック教会の一致を示すものであり、

国籍・人種・言語が異なる世界中の人々が聖体を中心として一致するものである」と話された溝部脩司教の言葉が脳裏をよぎった。

やがて、聖体を入れた銀の容器を持つた三人の若い修道士が、人波をかきわけて信者の口の中に聖体を受け入れさせてくれた。メキシコの太陽で乾いた聖体をいただき、生きる力が与えられた様な気がした。

聖体大会では、毎日、ミサと聖体拝領を受け、キリストと深く結ばれ、同時に、同じキリストをいただく世界各国の人々との深い交わりが実現した。

「パンは一つであるから、私たちは多数であっても一体である。皆が一つのパンにあずかるからである」(一コリント一〇・一七)

最後に、心に迫るパウロの言葉として、「ふさわしい心をもたず、主のパンを食べ、そのさかずきを飲む者は、主のからだに血に對して、罪を犯すことになる」(二コリント、一一・二七)

『御聖体への思い』

マリア 山田 のりえ

幼い頃、母や姉達の白いベール姿に、いつも憧れていました。姉達にせがんで、ベールを頭にかけてもらい、鏡の前に座りじつと見つめていたものでした。

「私も、この白くてきれいなベールが欲しい・・・」。そして、「早く初聖体を授かりたい・・・」。それが「御聖体」を意識した最初の事のように思います。いくつで初聖体を受けたのか記憶には残っておりませんが、御聖体をいただける様になつてからは、以前にも増して日曜日が待ち遠しく思う様になりました。

子供心に、悪いことを言ったりしてはいけない、それを守れなければ御聖体をいただけないと思い、一生懸命いい子でいようと頑張っていた様に思います。拝領前になると、なぜかすごく緊張し、そして、そのあとに必ずおとずれた安堵感を覚えています。その気持ち

は現在も続いています。

先祖代々、カトリック信者として、私も当然の様に幼児洗礼を受け、そのレールに乗り、途中、脱線した事もありましたが、両親の教えのもと、主人と共に子供達にも、その教えを伝える事が出来たのは、神様のお導きと感謝しております。

私自身、年齢を重ねるごとに神様への賛美、御聖体への思いが、より深くなつていく様に感じております。神に感謝。

